万感を込めて君の名を

文鳥（あやとり）

「アリスっお待たせっ」

座っている私を覗き込むようにして彼女は言った。背の低い彼女が背の高い私を見下ろす数少ない機会だ。校舎の増設のせいで常に陰の中に取り残されたやたらと精緻な造りの金属製のベンチ、誰よりこの場所が似合う私と、この場所が誰より似合わない少女。他の誰も知らない、いつ終わるとも知れない、いつもの放課後の光景。一つに結った柔らかい栗色の髪が少し乱れて、声の合間に荒い吐息が混じる。うっすらと日に焼けた腕を覆う半袖のシャツと、首筋に張り付く後れ毛を見て、そういえば夏が始まるのだと思いだす。

「大丈夫よ、アリーチェ。私も今来たところだから」

彼女の鼻のあたりに目線を合わせて微笑みながら、文庫本を閉じて膝の上に置く。彼女は胸をなでおろして私の隣に腰かけた。彼女が学校指定のプリーツスカートの裾を直すのぼんやりと見つめる。そもそも明確に時間を決めて待ち合わせているわけではないのだから、お待たせも何もないのだけれど、それは言わぬが花だろう。

「早速、今日の話を聞かせて頂戴？」

そういうとアリーチェは花がほころぶように笑った。造作の整った顔の中でも、ひときわ目を引く丸い瞳がゆるりと細められる。薄暗いこの場所に在ってなお光が差し込んでいるような琥珀の瞳。澄みきったそれに映ると自分のようなつまらない女さえ特別な気がしてくるから不思議だ。

「勿論っ」

「あとね、中庭に猫がいたのっ、とっても美人さんでね、綺麗な青い目をしてたの、まるでアリスの目みたいに」

白い鳥が晴れた空に映えて綺麗だったとか、家庭科の時間にハンカチにデイジーを刺繍したのだとか、ささやかな、されど彼女にとっては特別な話に耳を傾けていると、唐突に出てきた自分の名前に面食らう。

「綺麗？　たしかに私は猫みたいに目がつり上がってるけれど」
　正直に言って、私の色は結構よくある色だ。濃い青色の目に、真っ直ぐで硬い金色の髪。肌は白いけれど、あまり日向に出ないせいか、なんとなく不健康そうな印象を与える。不器量ではないと思うが、特に器量よしというわけでもないから綺麗と言われることは多くない。だからこそ、綺麗という単語と自分が上手く結びつかない。たとえ、それが色のことだとしてもだ。するとアリーチェは、ぱちぱちと長い睫毛を瞬かせた。
「綺麗よっ、いつもは海みたいな深い青なのに、楽しいときや嬉しいときは、キラキラして空みたいに透き通るのっ、すごく綺麗で、私、大好きだわっ」
　琥珀色の中で思わず目を見開く自分の顔が見えた。熱くなりすぎてベンチに手をついて私のほうに身を乗り出したアリーチェに、目を伏せて微笑む。
「…ありがとう」
　ああ、きっと、彼女の目を通して見る世界はこの上なく美しいのだろう。まるで星屑と陽光を砕いて刷毛で刷いたみたいに見えるに違いない。彼女は嫋やかな腕いっぱいに、星の数ほどの大好きを抱きしめながら生きている。そうでなければそんな瞳で生きられない。そんな風に笑えない。
「楽しいときや嬉しいとき…ね」
　そんなの、貴女の前だけよ。

　同じ綴りの違う名前の私たちはあまりにも正反対で、あの日、校舎裏の私を彼女が見つけなければ、きっと言葉を交わすこともなかっただろう。そんなことが、ふとした瞬間脳裏に浮かぶ。例えば、退屈な授業中に外を眺めるときだとか、風の匂いを感じた時なんかに。
『何読んでるの？』
　今だって目を閉じればありありと思いだせる。揺れた髪の一筋や、弾むような声色も。暗い部屋から晴天の下に躍り出たような、雲間から光が差したような、衝撃。あの時、人懐っこい笑みにさえ、私はすっかり緊張して

しまい、本の題名を答えるのがやっとだった。そうして黙り込んでしまった私に、彼女は美しい世界の切れ端をくれたのだ。頬杖を突きながら、教室の窓から外を眺めて、先生の言葉を右から左に聞き流す。早く、放課後になればいい。そうすれば、私は早足で教室を出て、校舎裏に向かう。ベンチに座って文庫本を開くけれど、内容なんてちっとも頭に入ってこなくて、一頁だって進まない。そうして、日向から取り残された薄暗がりで、不安定な約束に縋る。彼女が数多の誘いを断って、日陰に足を踏み入れるのを待つ。それから、待たせてしまったという彼女に、微笑みながら嘘をつくのだ。

「私ね、アリスと友達になれて本当に良かった」

アリーチェが緩く首を傾けて、蕩けるように笑う。年の割に幼気な仕草と共に告げられた言葉に血の気が引いた。彼女の淡く色づく頬と反対に、私の顔は蒼白になっているだろう。適当に誤魔化そうと口を開きかけるも、その瞳を見てしまえばもう駄目だった。気圧されそうなほどに透明で暴力的なまでの無垢。嘘をつくときには彼女と目を合わせないようにしていたのに、肝心な時に間違えてしまった。

「…友達」

「うんっ……違うの？」

「…」

耐えきれず目を伏せるも、視界の端でアリーチェが丸い目をさらに丸くした、次いで、その目が潤んでいく。立ち上がり、長い髪を翻して踵を返そうとした彼女の細い手首をとっさに掴んだ。

「…そうじゃないの」

言い訳にしか聞こえないことは重々承知していた。それでもこのまま帰すわけにはいかなかった。濡れた琥珀を縁取る睫毛に雫が光る。新雪に足跡をつけたような、花を手折るような背徳感。本当に、傷つけたいわけではなかったのだ。たとえ今となっては嘘にしかならないとしても。

「例えば、小説を読めば、たいてい一度は空についての描写が出てくるわ。どれもこれも洗練されて美しく、私には思いもよらない言葉でね。それらはピースがぱちりと嵌って目の奥で星が瞬くほどに説得力というか、ああ確かにそうだって思わせる何かを持っているの。でも、本当に恐ろしいことに、小説の中の空にどれだけ感銘を受けたところで、それは私のものじゃないの。私から生まれたものじゃないの。おまけに、どれほど素晴らしくてこの上ないと思っても、本物の空を表すには全然足りないのよ、それこそ何万ピースか数えきれないくらいね」

私はそこで一度言葉を切って、伏せていた顔をゆっくりと上げた。彼女は呆れてしまっていないだろうか。けれど、そんな不安を裏切るようにアリーチェは私を見つめていた。目は口ほどに何とやらだ。私は唇を少し湿らせて再び語るために口を開いた。彼女が続きを望んでいる以上、止まるわけにはいかなかった。それに、さっき言ったことと、これから言うことは、繋がり合い、絡み合っていた。綿を伸ばしても容易には切れないのと同じだった。さまざまな色が混ざり合っているものをほぐすのは難しいけれど、途中まで口に出してしまったそれは、風化してきらきらとした欠片になりだしてもまだ胸の中の残りと繋がっていて、このままだと窒息してしまいそうだった。

「笑わないで聞いて頂戴ね？」

「もちろんよ。当たり前でしょう」

――それとも、真剣な話を私が笑うとでも思ってるの？

頬を膨らませたアリーチェが上目づかいにこちらをジトリと見た。私がベンチに座っていて、アリーチェは私の前に立って少し前に身体を倒して背中で手を組んでいた。本当に怒っているのではないのは明らかだったが、そんなわけないと謝ると、いいよと彼女は言って、組んでいた手をほどいて体を起こした。その拍子にふわりと髪が揺れる。私は僅かに目を細めて、それで、と言った。本当に、貴女を疑ってるわけじゃないの、ただ、馬鹿みたいに突飛で、自分でもわかりきってはいなくて、あまりにも拙いのよ。

「何が言いたいかっていうとね、ええ、もちろん空のことではないわ。私が何故貴女を友達と言いたくないかの話。まず前提として、嫌いだから、なんてことはあり得ないわ。…だからそんな顔をしないで。私はね、貴女への気持ちに名前を付けたくないのよ。貴女との関係にも。恋も友情も素敵な名前だわ。さっき言ったような何かだってちゃんと持ってる。でも、いいえ、だから。一度でもそれらの名前で呼んだら、本当にそうなってしまいそうで怖いのよ。その言葉の型に無理矢理当て嵌めて一色で塗り潰すってことでしょう？　本当にそうかなんて分からないし、一つだけとも限らないのに」

私は出来るだけ静かに話そうとした。少しでも気を緩めたら溢れだして、自分もろとも彼女を溺死させてしまいそうだった。それで彼女に怖がられたら、もう生きてはいけないと思っていた。アリーチェは私の言葉を待っていた。私はチラリと彼女を見やって続きを話し始めた。終幕はすぐそこだった。

「それに、貴女への思いを、たった一つの誰かの言葉で済ませるのなんて御免だわ」

そうだ、結局のところ、それだけなのだ。吐き捨てるように言い切り、顔を歪める。まるで神に背いて罰を待つ罪人にでもなった気がした。

結論であり、宣戦布告であり、告白だった。

アリーチェと、彼女を取り巻く世界への。

握りしめた拳が今更震えた。アリーチェとの関係が変わるのが何より怖かった。だから、名付けられずにいたのに。けれど、同時にとうとうやってやったと高揚感がジリジリと這い上がってくる。宣言したのなら後は覚悟を決めるしかないのだから。アリーチェは黙っていた。かと思うと傍らに落ちていた木の枝をおもむろに拾い上げた。

「じゃあ、こうしない？」

「え？」

目を丸くする私に背を向けて、アリーチェはしゃがみこみ、枝で地面に何かを書き始めた。湿った土に次々と

何かが刻まれていく。細い指が木の棒を自在に操るさまはオーケストラの指揮者のようで、どこか絵空事じみていて、機械や道具は手の延長であると、理屈抜きに納得させるようなしなやかさだった。そしていくばくもしないうちに、出来た、という声を上げて彼女は立ち上がって枝を放り出し、くるりと振り返ると一歩左に移動し、それを指さした。

『Ａｌｉｃｅ』

私は窺うようにアリーチェを見た。分からなかった。彼女の意図も、盛り上がった土に縁どられた少し歪なそれが彼女の名前なのか、自分の名前なのかも。そんな私にアリーチェは満面の笑みを浮かべて誇らしげに両腕を広げたかと思うと、両方の掌で包み込むように私の手を取り、瞳を覗き込んだ。私を映す琥珀の瞳が光を受けたみたいにつるりと金色に透き通る。

「私、大好きっていう代わりにあなたの名前を呼ぶわっ。持ってる全部の思いを込めて、アリスを呼ぶのっ」

私たちの想いに、関係に、私たちの名前を付けるの。だから、あなたも私の名前を呼んで？　アリーチェがそう言い切るより先に、私は立ち上がって彼女に抱き着いた。震えそうになる声を抑える。痛いくらいに胸が詰まる。世界が光色に塗り替えられていく錯覚。自分がこれまでの人生で一番の笑みを浮かべていると知っていた。宝が腕の中で笑っている。その美しさを、この幸福を、表すに足る言葉はない。だから、呼ぶ。心を、魂を声に乗せて、万感をその名に込める。

「アリーチェっ、貴女って最高だわ！」